

博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び審査結果の要旨

(平成 22 年度 9 月授与関係分)

第 15 号

神 戸 女 子 大 学

は し が き

本誌は、学位規則（平成3年6月3日文部省令第27号）第8条による公表を目的として、平成22年9月27日、本学において博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

課程修了によるもの（課程博士）

(学位記番号)	(氏 名)	(論文題目)	(ページ)
文博甲第 10 号	軸丸 清子	サイコセラピューティック・ナ ーシングの構想 ー実践と教育に関する研究ー	1

氏 名 (本 籍)	軸 丸 清 子 (大分県)
学 位 の 種 類	博 士 (教育学)
学 位 記 番 号	文博甲第 10 号
学 位 授 与 の 年 月 日	平成 22 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科 教育学専攻
論 文 題 目	サイコセラピューティック・ナーシングの 構想 —実践と教育に関する研究—
論 文 審 査 委 員	主査 教授 前 田 研 史 副査 教授 中 島 實 副査 教授 河 上 誓 作

論文内容の要旨

本論文は、軸丸氏が、看護学と臨床心理学の知見・技法を統合させて患者のケアに当たってきたその看護実践と教育実践について、「サイコセラピューティック・ナーシング (Psychotherapeutic Nursing)」(以下、PTN と略す) という視点から総合的に検討することでその意義を明らかにしようとするものである。

以下に、各章の要旨を概説する。

まず序章で、現代の看護が、医療の高度化に伴って疾患中心、身体中心の看護となり、患者の心や生活に目を向ける余裕をなくしている現状を指摘したうえで、患者一人ひとりのニーズが尊重され、身体・心理・社会的側面の全体に配慮した心の看護が必要であるとする。

第 1 章では、PTN の基本的枠組みと、従来から行われてきているリエゾン精神看護や看護カウンセリングとの異同について整理している。論者は、PTN は、リエゾン精神看護や看護カウンセリングにおける機能を含み込んだうえで、サイコセラピーの資質を備えた看護師 (PTN ナース) の活動により、看護の対象者である患者が生活している病棟全体にわたってサイコセラピューティックな環境を創造しようとするものであるとする。さらには、必要に応じて患者の家族だけでなく、患者にかかわる人々や地域の人々なども対象に、より広範な視点から統合的

にアプローチしようとするものであると述べている。

そのうえで、以下の諸点について本論文全体を通して検証することを目的としている。すなわち、患者は、その病のために、さまざまな欲求や願望が傷つき一時的に退行した状態にあること、人間は健全な方向へと向かう傾向を潜在的に持っており、一時的に退行した状態にある患者も、一定の環境が整うとその傾向が顕在化すること、患者は、PTN の環境の下で、主体的に健康回復、維持・増進、発達・成長していけること、PTN は、ヒューマンケア教育を受け、スーパービジョンを体験した看護師によって可能になること、PTN ナースは、患者の問題解決を援助する機能を創造的に拡大することができること、PTN ナースは、患者中心の看護のために医療スタッフと効果的な連携ができることである。

そして、第2章から第4章までは、論者が実践した PTN とスーパービジョンの事例を分析している。

第2章では、脳損傷による重篤な後遺症を抱えた患者への PTN 実践の分析を通して、患者の尊厳ある「生」を支える PTN の特徴を明らかにしたうえで、その限界と課題についても検討し、PTN ナースが、看護師や他の医療スタッフに対して、サイコセラピューティックな視点に基づく患者理解を図る際の留意点を整理している。

この事例における PTN は、次のようなプロセスで進んだとする。すなわち、患者の苦痛の緩和を図ることにより信頼関係を樹立し、患者の障害や残された能力に応じたコミュニケーションのチャンネルを探し、患者の欲求や願望、感情の表現を助ける。さらに、患者が持てる力を十分に発揮できるよう環境を調整し、家族や医療スタッフとのコミュニケーションを促進させ、孤独から解放する。また、担当看護師に対して PTN ナースの臨床実践を示すことで関わりモデルとなる。合わせて、主治医や他の医療スタッフと治療・援助の目標を共有し連携を図るという過程である。

第3章は、死から逃れることのできない病を抱えた患者が、尊厳ある「死」を受け入れるプロセスにおいて果たした PTN の意義を検討している。PTN ナースが、患者の根源的不安を理解し、そのニーズを敏感に読み取りながら柔軟に患者へ関わろうとしながらも、病棟看護師との間に生じる患者理解のくい違いを、サイコセラピューティックな視点から捉えることで乗り越えていくプロセスが示された。そして、PTN ナースの機能は、患者の苦痛や苦悩を軽減し、これまでの人生を振り返り意味を見いだせるようサポートすること、最後の瞬間までその人らしく生きることができるよう支えること、患者・家族と医療スタッフの関係を調整すること、家族の身体的・経済的負担と心理的苦痛を理解し支えること、看護師のストレスに配慮し心理的ケアを行うこと、厳しい予後を迎える患者の全人的な理解を助け、協働できるようスタッフの連携をサポートすることにあるとする。

第4章は、心理的問題と身体疾患を合併している患者の看護への PTN に基づくスーパービジョンの分析を通して、そのプロセスの特徴を明らかにし、PTN を実践するうえでの意義を検討

している。担当看護師に PTN の視点に基づくスーパービジョンを行うことによって、患者の言動など目の前に起こっている現象の意味が看護師にわかるようになり、看護師自身もサイコセラピューティックに関わることが可能になるとしている。また、担当看護師の変化が他の病棟スタッフにも影響を及ぼし、病棟全体がよりサイコセラピューティックに機能するようになることも示された。このように、組織化された心理的ケアの提供が可能になることで、患者を心理的な側面のみでなく、体系的な方法で身体的・社会的な側面からも観察し、その上で病気から発生した生理的な問題にも早期に対応することを可能とし、予防的なケアを提供できるとする。

第 5 章は、前章までの事例の分析によって得られた知見を踏まえたうえで、PTN を提供できる看護師を養成するために必要な教育のあり方を明らかにすることを目的に、論者自身が大学看護学科で行った PTN を念頭においたヒューマンケア教育の効果について、学生 147 人を対象に評価している。ヒューマンケア教育を構成する諸科目の授業実施前と実施後、および実習後、論者が作成した「援助的対人関係形成技能」評定尺度を用いて比較している。この尺度は、対人援助者の基本的援助技能を、「共感的理解」「うち解け（融和性）」「肯定的配慮」「自己統御」の 4 因子から構成されているとする。評価を実施した結果、有意差は、「自己統御」を除く 3 因子において授業前と授業後との間に、また、4 因子全てにおいて授業前と実習後との間に認められた。このことから、ヒューマンケア教育により、PTN において必要と考えられる能力が一定程度養成できている可能性が示唆された。しかし、授業後と実習後との間では 4 因子ともに有意差は認められなかったことから、授業と現場での実習における実際の体験との間に相当なギャップがあることを明らかにしている。

第 6 章は、大学の学部で論者による PTN を念頭においたヒューマンケア教育を受け、その後現場で看護実践を行っている看護師 8 名を対象に半構造化された面接を行い、その教育が看護実践にどのような効果をもたらしているかを分析している。その結果、ヒューマンケアの基礎知識や実践技術、体験学習の内容、授業の印象等がよく記憶されていた。また、この教育を受けた体験が、患者との関わりを深めることのできる対人援助者としての自信の基盤となっており、他の看護師との連携を図る能力を向上させていることも示された。また、患者やスタッフから関わりモデルとして評価されていると感じている様子も明らかになった。ただし、実践の場において心理的ケアへの要請がありながら、それに応えるだけの能力を持った看護師が乏しいことを感じており、卒後教育の体制づくりやヒューマンケア技術の養成のための研修の必要性や、ストレスを抱えた看護師のメンタルヘルスのための体制づくりの必要性を強く感じている状況も明らかになった。

第 7 章で論者は、ここまでの検討から、PTN は、看護者教育、看護、対象者の心理過程の 3 つの領域から構成されているとしている。それは実際には、ヒューマンケア教育を受けた PTN ナースが、患者の基本的欲求の欠乏状態や残された身体・心理・社会的機能のアセスメントを

行っただけで可能な限りの環境調整を行いながら、患者の自律的な欲求充足と発達課題への取り組みを支援していく過程と、病により心理的にも傷ついている患者が、環境を主体的に活用しながら自律的に欲求を充足させ自信を回復していく過程とが相互に関わりあいながら展開していくことにより、患者の自己実現（それは、尊厳ある死をも含む）へと至るものであることを示している。

最後に論者は、大学教育においてヒューマンケア教育を受けて卒業していった実践看護師たちがモデルとなってPTNの態度や考え方を広めていくことで、患者が主体性を回復し、自己の能力を十分に発揮して自分で欲求や願望を満ちし、自己の健康回復、維持・増進、発達・成長に主体的に取り組めるようなサイコセラピューティックな看護環境を創り出していくことから始めることが必要であると締めくくっている。

論文審査結果の要旨

サイコセラピューティック・ナーシング (Psychotherapeutic Nursing) という用語は 1960 年代の文献においてすでに見られるが、それは精神科領域における看護師の患者への関わり方のあり方に限定されたものである。また、わが国では、上別府 (2007) による編著「サイコセラピューティックな看護」が出版されているが、そこで紹介されている看護実践は多様な内容を含んでおり、統合的な視点が確立するところには至っていない。本論文は、現代の看護が、医療の高度化に伴う疾患中心、身体中心の看護となり、患者の心や生活に目を向ける余裕をなくしつつある現状に対して、患者一人ひとりのニーズが尊重された心理的ケアのあり方を、看護学と臨床心理学の知見・技法を統合させたサイコセラピューティック・ナーシング (PTN) という視点から、看護師養成から臨床実践までを包括的に検討したものである点にその独自性がある。

本論文の第 1 章では、PTN の基本的枠組みは、サイコセラピーの資質を備えた看護師 (PTN ナース) の活動により、患者が生活している病棟全体にわたってサイコセラピューティックな環境を創造しようとするものであるとする。論者のいうサイコセラピューティックな環境の実践については、この後の各章で明らかにされていくわけであるが、カウンセリングやサイコセラピーに関する知識や技能を持った限られた看護師が特定の患者に個別的・専門的にアプローチするあり方と異なり、患者の生活環境全体を心身両面にわたってサポート的なものとしていくことを目標とし、そのための基盤としてサイコセラピーの考え方と技法を導入しようとしている点に特徴がある。

第 2 章は、脳損傷による重篤な後遺症を抱えた患者への PTN 実践の分析であるが、論者は PTN ナースとして患者の潜在的可能性を柔軟に読み取りながら、患者との間にコミュニケーション

チャンネルを紡ぎだしている点、その実践者としての高い資質を示しているといえる。そして、論者の PTN 実践が他のスタッフに、患者の潜在的な可能性を再認識するきっかけを提供することとなり、医療スタッフや他の患者との親密な交流を導き出し、病棟全体がサポータティブな空間として機能する様子を明瞭に描き出している。ただ、患者の夫との関係修復が当初の見通しのようにいかず、その断念と新たな施設への移行を進めていくこととなった。このとき論者は、患者へ施設移行を積極的に働きかけている。この状況においては、論者がケースワーク的な機能を担っていたとすることができるが、PTN ナースが患者の退院後の生活にどこまで関与するべきか、今後さらに検討が必要であろう。

第3章は、PTN ナースが、死に直面している患者の根源的不安を理解し、そのニーズを敏感に読み取りながら柔軟に関わっている様子が見事に描かれている。また、その過程で生じた病棟看護師との患者理解における意見のくい違いを乗り越えていくために、看護師の精神的負担の大きさに共感しながらも、患者の側へ寄り添う姿勢を一貫して示し続けることで、看護スタッフの姿勢が変化していく様子が明示されている。このような死に直面している患者への看護は、いわゆるターミナルケアとして従来から行われ、そのような患者には臨床心理士のカウンセリングによる心理的ケアも含む多くの工夫が実践されてきている。しかし、本事例では、看護師自身がサイコセラピューティックな素養を身につけることで、看護行為そのものが、患者が自らの死を受容することができる段階に至るまで、理論的裏づけのもとで心理的に深く支えていくことができる可能性を示したものといえる。

第4章は、重篤な心理的問題と身体疾患を合併している患者を担当している看護師への PTN に基づくスーパービジョンの分析を通して、PTN の効果を確実なものとするスーパービジョンの意義を検討している。担当看護師が、患者の言動など目の前に起こっている現象の意味を共感的に理解できるようになるためには、PTN の視点に基づくスーパービジョンは必須のものであると考えられる。ただ、論者が述べているように、看護基礎教育には、現在専門学校、短期大学、4 年制大学と複数の教育制度があり、スーパービジョンを行う際に、看護師としての基礎的資質を踏まえたうえでどこまでの専門性を求めるべきか、今後検討が必要であろう。また、スーパーバイザーに求められる資質については一部述べられているが、その養成のあり方についての検討はまだ十分とは言えない。

第5章は、PTN を念頭においたヒューマンケア教育の効果について、実習体験が対人援助技能の形成には十分寄与していないとしている点について、論者は、知的理解と実際の活動を埋めることを目的とした実習中におけるスーパービジョンが必要であるとしている。ただ、それ以前に、実習前のヒューマンケア教育の段階において、実習へつながるカリキュラムのあり方を再検討する必要があるが、その点は不十分なままである。たとえば、カウンセリング論の授業に看護現場での看護師－患者関係を想定した実践的で具体的な場面設定をしたロールプレイをもっと組み込むなどの工夫を検討する必要がある。また、ここで用いた評価尺度における

高得点群と低得点群とを比較することで、授業や実習の効果についてより詳しい分析をすることも可能となろう。

第6章は、大学学部で論者による PTN を念頭においたヒューマンケア教育を受け、その後現場で看護実践を行っている看護師への半構造化された面接を行い、この教育を受けた体験が、実践看護師として患者との関わりを深めることのできる対人援助者としての自信の基盤となっていることが示された。このように、看護基礎教育の段階から臨床の場における看護師としての体験までをつなげて検討している点は高く評価できる。ただし、今後の課題として、PTN ナースとしての資質が実際にどのように獲得されているのか、あるいは、病棟で PTN が実際にどの程度有効に機能しているのかなどといった点について、より客観的な評価手法を開発していくことが求められる。

第7章では、論者は、看護教育の段階を踏まえたうえで、看護の段階と患者の心理過程とを相互の関係のもとでとらえている。このような視点は、PTN のプロセスを多面的に捉えるものとして描き出すことに寄与している。ただし、PTN が、病棟全体をサイコセラピューティックな場としていくことを目指すものであるならば、病棟で生活している患者集団とそのケアにあたる看護者集団とのグループダイナミクスといった次元にも目を向けていく必要がある。また、PTN をより効果的なものとしていくために、患者・看護師と医師との関係をどのように構築していくのかといった点を今後検討していく必要がある。さらに、PTN ナースと臨床心理士や医療ソーシャルワーカーとの連携についても、その実際を検討していくことが求められる。

以上見てきたように、本論文は、医療の高度化に伴って生じてきた患者－看護師関係における問題を、サイコセラピーの考え方と技法を導入することにより、その変容を図るための具体的で総合的なアプローチを構築しようとするものとして高く評価できる。本論文の事例分析は、重篤な身体疾患を抱えた患者にとどまっており、今後、外来患者や地域への訪問看護における PTN 実践についても検討していくことが期待されるなど、課題は残されているものの、本論文は、看護基礎教育の段階から看護実践の段階までを見通し、さらに、看護師の再教育のあり方にまで踏み込んで総合的に検討している点で貴重なものである。近年、従来のサイコセラピーにおけるように、対象者の内的世界に焦点をあて洞察を目指して深めていく作業だけでなく、援助対象者の現実の生活世界へ働きかけ、日常生活場面における援助者との肯定的な出会いを心理的ケアの重要な要素とするアプローチも重視されてきているが、本論文で示されたアプローチは、そのような流れとも深く関わっており、臨床心理学と看護学の間をつなぐ新たな視点を提出しているという点においても非常に意義があるといえる。

試験結果の要旨

本論文についての公開口頭試問は、大学院関係教員、大学院生、学外の看護関係者等の出席のもとに、平成22年8月9日（月）14時から2時間近くにわたり行われた。最初の30分間パワーポイントを用いて論文の概要について説明があり、その後十分な時間をかけて論文の細部にまで及ぶ質疑応答が行われた。論者の応答は的確であり、残された課題に関しても十分な理解を示し、今後の展望についての積極的な意欲を確認することができた。以上のように、口頭試問の結果は満足すべきものであった。

学力確認の結果の要旨

学力の確認は、本学学位規程第2条第2項により省略した。

学位授与の可否に関する意見

以上の所見により、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに値すると認められる。